

いざ子ども早く日本へ

——ヤマトについて——

神 野 富 一

一

山上臣憶良在^二大唐^一時憶^二本郷^一作歌

いざこどもはやく^まとへおほ^とのみつのはま^つま^ちこひぬ^らむ
去来子等早日本^二辺^一大伴御津乃^二浜松^一待恋奴良武

(万葉集、卷一、六三)

訓読・注釈・批評の上で本歌の含む問題としては、次のような諸点が列挙されよう。まず初句「いざ子ども」について、「子ども」とは誰をさすのか、それと関連して歌の場はどのようなであったか。第二句「早く日本へ」について、「日本」の訓と解釈。第三句「大伴の」について、「大伴(の)」は地名か枕詞か。第四句から結句へかけて、「浜松が待ち恋ふ」とはいかなる表現か。題詞と歌との関係。題詞の「本郷」の訓と意味。さらに、本歌が詠まれたのは、この作者憶良を含む第七次遣唐使たちの慶雲元年(七〇四)帰朝時か、それとも慶雲四年(七〇七)帰朝時か。懷風藻の弁正の「在^レ唐憶^二本郷^一一絶」との関係は如何。また高市黒人の類歌(卷三、二八〇)との関係は如何。などである。

(1)

それらのうち、小稿では第二句「日本」の解釈の問題を中心に考察を進め、関連がある場合に他の問題にも言及する。さてその際、読解の態度として、万葉集中唯一外国で詠まれた歌であるという特殊性を本歌がもつことを前

提にはしない。また本歌を山上憶良という個性において読み解こうという方法も前提としてはもたない。可能な限り、歌のことばや表現に則した読解を試みたい。

二

第二句「早日本辺」は、「ハヤヒノモトへ」という訓での享受史が長かった。元暦校本以下の諸本の訓がそうであるほかにも、秘府本萬葉集抄、宗祇萬葉抄、また本歌を引用する綺語抄、古来風体抄、新古今和歌集、歌枕名寄、夫木抄、井蛙抄など皆この訓に従う。渋谷虎雄『古文獻所収萬葉和歌集成』によっても、平安から室町期にかけての、本歌を引用する三十数種類の書においてすべてヒノモトであり、ヤマトと訓むものを見出すことができない。さらに浜松中納言物語の中の、本歌をふまえる歌にも、

日の本のみつの浜松こよひこそ我を恋ふらし夢に見えつれ

と「日の本」とある。よって平安中期以降この訓が長くかつ広く行なわれたことが知られる。しかし類聚古集の右墨訓および京都大学本の左緒訓に「ハヤクヤマトへ」とあり、また萬葉代匠記初稿本で、

はやひのもとへ、これをはゝやくやまとへともよむへし。

と示唆されて以来、近世にはようやく「日本」の訓が優勢となり、近代には定説化した。

「日本」をヤマトと訓む主たる根拠は、

日本と書て、集中に専らはやまとゝよみつ。

と、集中の十数例に及ぶ用例からの類推にある。⁽¹⁾また傍証として、神代紀の

おほやまと
大日本日本此をば耶麻騰と云ふ。下皆此に效へ。豊秋津洲

という訓注、また高市黒人の歌に、

去来児等倭部早白菅の真野の榛原手折りて帰かむ

(巻三、二八〇)

と類句のあること、さらに他の「倭」「山跡」などと表記するヤマトの諸例からの類推が挙げられよう。こうして本歌の「日本」の訓はヤマトと定められてきたが、しかしヒノモトをヤマトと訓み改めても、「日本」の意味は変えられなかった。「大唐」(題詞)に対する「日本国」と解されてきたので、

日本は京ミヤコの謂ミヤコヒなり。

(萬葉集檜婦手)

日本は大和国をいふ。

(萬葉集古義)

などと異議を唱えるものを近世において少数見出せるものの、現在においてこの「日本」を「日本国」とする解はすこぶる安定しているかにみえる。

けれども、この「日本」は檜婦手や古義などという通り、狭義のヤマト(現在の奈良県。以下、この範囲、またはその一部、または奈良県を中心として一部の畿内地方をさす場合には「大和」、日本全体をさす場合には「日本」と適宜書き分ける。また、両者いずれかに限定しない場合は、「ヤマト」と書く。ただし、引用歌中では原表記を活かすことにする)を意味すると解すべきである、というのが私見である。以下にはそう考えるべきいくつかの根拠を示そう。

三

まずは、ヤマトの用例とその表記の検討からである。旧稿(2)ですでに述べたところだが、集中ヤマトの用例は歌中において計六二例、うちヤマト三四例、ヤマトシマまたはヤマトシマネ五例、ヤマトヂ四例、ヤマトメ一例、オホ

ヤマト一例、ヤマトノクニ一七例。以上のうち、ヤマトからヤマトメまでの計四四例は、二例を除いてすべて大和をさし、日本国（日本全土）を意味しない。その二例中、一例は当該歌で、他の一例は藤原仲麻呂の、

いざ子ども狂^{なほ}わざなせそ天地^{あめつち}の堅めし国そ夜麻登^{やまと}之麻祢^{ましね}は

（巻二〇、四四八七）

このヤマトシマネは、文脈において日本をさすが、ただ「国、そ」とも合せ詠まれている点が他のヤマトの例とは異なる。

それではヤマトを用いて日本国はどう表されたかという点、オホヤマト一例（巻三、四七五）のほかは、ヤマトノクニという語形によってである。ヤマトノクニ一七例中、一〇ないし一一例までが日本国を表すとみられる。このヤマトノクニの例には、すべて「そらみつ」「あきづしま」「しきしまの」などの称辞としての枕詞が冠されるという特徴がある。そして、この「枕詞＋ヤマトノクニ」が大和において大和中心の日本の国を宣揚する表現であること、一方「ヤマト」は異郷においてやはり大和を日本の国を中心として位置づける表現であること、そして両者相補って大和を中心とする日本の国という和歌的風土の世界を和歌内部に構造化する働きをしているということ、などは旧稿に述べた。が、それはともかく、こうして和歌の世界では日本国を表す場合はヤマトノクニといわれたので、先の唯一の例外、仲麻呂のヤマトシマネも「国そ」と合せ詠まれていることによって日本国を表すことが可能になっているとみられよう。

ただし、集中の題詞・左注など散文部分では、「日本挽歌」（巻五、七九四）・「倭歌」（同、八七六）・「倭詩」（巻一七、三九六七）・「倭琴」（巻七、一一二九。巻一六、三八五〇）・「日本琴」（巻五、八一〇。巻七、一三二八）と、和らげればヤマトと訓みえ、しかも日本を表すとみられる例が七例ほどある。しかし、歌詞と散文語の別は無視するべきでない。

すると、集中の歌詞におけるヤマトの用例から推せば、当該歌のヤマトも大和と解するほかはない。そうではな

く、もしこのヤマトのみを日本国と解すべきだとするなら、その根拠が示されねばならない。そしてもしそれが可能であるとすれば、それは本歌の「日本」という表記にかかわってであろう。それにはまた本歌が外国で詠まれた歌であることも関係してこよう。従来も、たとえば、

従つてこもヤマトへと訓むべきであるが、ただここに特に「日本」の文字が書かれていることは、日没する国にあつて「日の本のやまと」を慕ふ心がこの文字になつたとも考へられようか。 (沢瀉久孝『萬葉集注釈』)

「日本」は日本全体を指していた。つまりわが身を国外においたものの表現であつた。遙かな家郷への無限の思慕は、この外つ国にあることの自覚の中に発せられた。

(中西進『山上憶良』一八五頁)

ヤマトに「日本」の文字を宛てること(中略)集中十八例ばかり。中でもここは、外国に対する自国「日本」を意識した表記である。同じ憶良の「日本挽歌一首」(5・七九四・七九九)もその底に漢詩文への意識を強く持っている。

(伊藤博『萬葉集全注巻第一』)

など、本歌が外国で詠まれた点を重視して「日本」の表記の意味を強調する見解がある。またこの「日本」の表記を、題詞の「大唐」との対比において重視する見解もある。そこで、次にはヤマトの表記例をみよう。

集中、歌詞においてヤマト(ヤマトノクニなども含む)は、仮名書きの例を除けば、「倭」(二〇例)・「山跡」(一七例)・「日本」(一五例。ほか「大日本」一例)・「山常」(一例)と書き表されているが、個々の例に則してはいま一応不明だとしておくとしても、全体としては表記において大和と日本全土の書き分けはなされていない。たとえば、「倭(の国)」で大和を意味するもの一七例に対して日本全土を意味するもの三例であり、「山跡(の国)」ではそれぞれ二例と五例、「日本(の国)」では一四例までが大和を意味し、日本全土を意味する確例は一つもない(当該歌は除く)といったぐあいである。そしてこの統一的な書き分けが認められないということは、先に引いた題詞・左注のヤマトの表記についてもいえるのであって、「日本挽歌」「日本琴」と「日本」で日本全土を意

味する例がある一方で、「倭歌」「倭詩」「倭琴」と「倭」でも日本全土を意味している。中西進氏は集中の「日本」の表記に官人意識を認めている(『山上憶良』一八二―五頁)が、少なくとも「日本」という表記で日本国を意味する傾向性は全く乏しい。

次に巻一におけるヤマトの表記についてはどうか。ヤマトは「山跡」(一)・「山常」(二)・「八間跡」(二)・「倭」(二九・三五・六四・七〇・七一・七三)以外に、「日本」が、当該歌のほか、

吾妹子を去来^{いざみ}見の山を^{やまと}高みかも日本の見えぬ国遠みかも (四四。石上大臣の伊勢行幸従駕作)

日本の 青香具山は 日の経^たの 大^みき御門に 春山と 茂^しみさび立てり (五二。藤原の宮の御井の歌)

と二例みえるが、いずれも大和の意であり、作歌年代も当該歌よりも古い。これらの例は、かえって当該歌の「日本」の表記を特別視すべきでないことを教えるだろう。巻二には、「山跡」(九一)・「倭」(一〇五)といずれも大和を意味する例が二例みえるのみ。

さらに、本歌が山上憶良の作歌であるという点に注目して、集中憶良のヤマトの表記例についてはどうか。本歌のほか、歌詞には「好去好来^{かみよ}の歌」(巻五、八九四)に、

神代^{かみよ}より 云ひ伝^つて来らく そらみつ 倭^よの国は 皇神^{すめかみ}の 蔽^{いづく}しき国 言^{ことたま}霊^{たま}の 幸^{さき}はふ国と 語り継ぎ 言ひ継^つがひけり (中略) 天地^{あま}の 大御神^{おほみかみ}たち 倭^よの 大^{おほく}国^{くに}霊^{たま} ひさかたの 天^{あま}のみ空^{そら}ゆ 天^{あま}がけり 見渡^{みわた}したまひ (下略)

と二例みえ、題詞には、

日本挽歌一首

(巻五、七九四)

書殿^{しよてん}にして饒酒^{にぎさけ}する日の倭歌^{やまと}四首

(同、八七六)

とみえるが、まず歌詞の二例が一方は「そらみつ倭の国」で日本国を意味するにもかかわらず「倭」と書かれてい

る点、またもう一例「倭の大国霊」もやはり「倭」と書くが意味は大和である点が注意される。この歌においては日本国と大和で文字による書き分けはなされていない。しかもこれが遣唐大使に贈った歌で、六三番歌と同様外国に対する自国を意識する度合いの強い状況での例であることにも留意しておきたい。題詞の二例では、一方が「日本」、他方は「倭」でいずれも全土を意味し、ここにも特に積極的な書き分けの意識は認めがたい。ただし、「日本挽歌」の方はこれを「ニホンバンカ」または「ニッポンバンカ」と音読すべきだとすれば、「ニホン」または「ニッポン」という国号を書き表す意識的用字ということになるが、ヤマトの例からははぜれる。

以上、憶良の歌詞・題詞におけるヤマトの表記の検討からも、本歌の「日本」を全土と解すべき根拠は見出しがたいということになる。⁽³⁾

もっとも、この時代の万葉集以外の文献に、「日本」で全土を表すことがなかったわけではない。古事記には「日本」の表記がなく、風土記にも「日本武尊」数例のみだが、日本書紀には多くみられる。かつ紀はヤマトの表記に意識的で、神名・人名に含まれるものを別にすれば、大和は「倭」または「大倭」で、日本全土は「日本」で表される場合が圧倒的に多い。宣長が、

さて紀中のやうを考るに、おほく別名には倭をもちひ、惣名には日本を用ゆ。又別名ながらも公オホヤケにかかるところは日本とかけり。
(石上私淑言)

というごとくである。「倭」「大倭」で全土を意味する場合も比較的多いが、それらはほぼ内外の文献の引用の場合に限られる。

こうして紀において認められる「倭」と「日本」の書き分けは、続日本紀でさらに徹底している。続紀では、大和は「大倭」など(天平勝宝三年一〇月まで「大倭」、ただし天平九年二月から同一九年三月までは「大養徳」、天平宝字二年二月以降は「大和」)で書かれ、対して全土はすべて「日本」で表し、しかもそのほとんどが外国関係

記事に表れている。中でも次の記事は憶良とかかわりが深い。

秋七月甲申の朔、正四位下栗田朝臣真人、唐国より至る。初め唐に至りし時、人有り、来りて問ひて曰はく、「何処の使人ぞ」といふ。答へて曰はく、「日本国の使なり」といふ。(中略)問答略了りて、唐の人我が使に謂ひて曰はく、「亟聞かく、海の東に大倭国有り。これを君子国と謂ふ。人民豊饒にして、礼儀敦く行はる」ときく。今使人を見るに、儀容大だ淨し。豈信ならずや」といふ。語畢りてさりき。

(慶雲元年七月条。新日本古典文学大系『続日本紀』一による)

憶良らの遣唐大使、栗田真人の帰国報告の中にみえる、渡唐の際の唐人との問答で、「大倭国」と聞いていたという唐人に対して使節は「日本国の使なり」と名乗ったという。これが「唐に対して日本の国号を称したはじめ」(新大系本注)であったとすれば、彼ら一行は海外で「日本国」を強く意識し、主張したわけであろう。このとき書記役たる「遣唐少録」であった憶良はましてそうであったかもしれない。

そのほか、公式令詔書式の冒頭に「明神御宇日本天皇」という称号がみえる。詔書で意識的に用いるこの天皇の称号は外国使に対する用であるらしく、やはり対外国の意識が強く働いている「日本」の例である。

こうして、この時代の万葉集以外の文献では「倭」と「日本」の書き分けがなされ、「日本」が全土を表すものがある。けれども、以上の紀・統紀・令などの「日本」は、表記のレベルでの意識的な用字であり、またまずはそれらの文献内部における用字にとどまることに留意しなければならない。それらの文献の制約をこえて、「日本」が全土を意味する表記として万葉時代に一般的に使用されていたわけではないことである。宣長が、

夜麻登といふに、日本といふもじを用ふことは、書紀よりはじまれり。そはいまだ例なき事にて、世のまどふべき故に、神代卷に、日本此云三耶麻騰、下皆效此、といふ訓注はあるなり。古事記は、大化の年よりはるかに後に出来つれども、すべての文字も何も、ふるく書伝へたるまゝにしるされて、夜麻登にもみな倭字

をのみかきて、日本とかゝれたる所はひとつもなきを、書紀は、漢文をかざり、字をえらびてかゝれたる。故に、あらたに此嘉号ミヤナをあててかゝれたるなり。
(国号考)

というところには理があつて、万葉集に「倭」「山跡」「日本」の書き分けがなされていない事実もそのことを証する。まして万葉集のヤマトは、基本的には音声語としての性格が強く、表記は二次的である。紀・統紀・令などの表記レベルの「日本」から万葉歌の「日本」について言及しうることは少ない。

四

次に、同じ憶良の遣唐使関係歌である、「好去好来かうきようかうらいの歌」を参照しよう。

好去好来かうきようかうらいの歌一首反歌二首

倭の 大国 <small>おほくにみたま</small> 靈	ひさかたの 天 <small>あま</small> のみ空 <small>そら</small> ゆ	天がけり 見渡したまひ	事畢 <small>は</small> り 還らむ日には	また更に大
御神たち 船舳 <small>ふなのおし</small> に	御手打ち掛けて 墨繩 <small>すみなは</small> を	延 <small>は</small> へたるごとく あぢかをし	値嘉 <small>ちか</small> の岫 <small>さき</small> より	大伴 <small>おほとも</small> の御津 <small>みづ</small> の
浜辺 <small>はまべ</small> に	直泊 <small>ただ</small> てに	み舟は泊てむ	つつみなく	幸 <small>さい</small> くいまして
			速帰 <small>はや</small> りませ	

(八九四)

反歌

大伴の 御津の松原 かき掃きて 我立ち待たむ 速帰りませ
 難波津に み舟泊てぬと 聞こえ来ば 紐解き放けて 立ち走りせむ

(八九五)
 (八九六)

天平五年三月一日に、良の宅にして対面す。献るは三日なり。

山上憶良

謹上 大唐大使卿 記室

第九次遣唐大使となった多治比真人広成が、出港間近い天平五年(七三三)三月一日、この頃はすでに筑紫国守の任を解かれて帰京していた憶良を家に訪問した。これに応えて制作されたのがこの歌で、三月三日、大使に献っている(左注)。憶良七四歳のときで、六三番歌の作歌時点よりはすでに三十年近くも隔たっている。

さて歌は、「言霊」の力にかけて大使に選ばれた広成を言寿ぎ、その往還の無事を祈る内容であるが、ここでは往路帰路の表現について二つのことに注目したい。

第一点は「倭の大国霊」である。この歌、傍線を付したA部が往路の航海を、B部が帰路の航海を叙しているとみられるが、そのA部で、海原を領する「諸の大御神たち」が船の舳先で先導するというのに対して、天空を飛び翔って見守るのが「天地の大御神たち」、その中でも別して挙げられるのが「倭の大国霊」である。B部では特に名は挙げられていないが、「(また更に) 大御神たち」の中に、A部に挙げられた諸神とともに含まれているとみてよい。

「倭の大国霊」は、現在天理市新泉にある大和神社の祭神。「国霊」(国魂)は国土の神霊の意で、「大国(御)魂の神」は「全国的に一般的な神名」(新潮日本古典集成『古事記』三八五頁)だから、「倭の大国霊」は大和の国土を支配する神である。そしてこの歌でこの神が航海神らしくいわれ、また「天地の大御神たち」の中でひとり別して固有名詞で言挙げされる理由は、この神が皇室の祀る神であるということのほか、まさにこの大和の国土の神であると

いう点に求められよう。大和を出発し、大和まで無事で帰ってくるべき旅だからこそこの神の加護が特に願われた。ここには、遣唐使の旅は「大和→唐→大和」と、大和を起点・終点とするという観念がうかがわれる。

そうした旅の行程の観念は、B部、帰路の表現にもうかがわれる、ということが第二点である。帰路は「値嘉の岫」（長崎県福江島の三井楽付近か）より「大伴の御津」までがとりわけて詠まれ、「大伴の御津」は大和の外港としての性格をもつから、やはりここでも大和までの帰還が詠まれているのである。二首の反歌でも「大伴の御津」「難波津」と繰返されている。「唐国」から「日本国」へというふうには詠まれていないことに留意しておこう。

ところで、この歌では言霊や神々が揚言され、全篇大使の旅の無事への祈りに満ちている。航海が神々の守護を主体に表現されているのもそうした呪歌的な性質を示している。そして、この旅の無事への祈りを歌にこめるという点では、六三番歌も同様であろう。

いざ子ども早く日本へ大伴の御津の浜松待ち恋ひぬらむ

は、特に反歌の一首（八九五）と「大伴の御津（浜）松」の語、「松」から「待つ」を導く表現、「待つ」「早く（帰る）」の語を共有し、また全体として一方は唐土をこれから去ろうという立場での、他方は唐土から帰る人を待とうという立場での歌としてまるで三十年近くの時間の隔たりを消したかのように対応している。また、「早く（帰らむ）」との言挙げは、集中に多い「早帰り来ね」「早帰りませ」「早渡り来て」「早帰り来」「船は早けむ」などの待つ側からする、慣用的な旅立つ人の航海の無事を祈る言挙げと対応する。さらに、これまた慣用的な「松」から「待つ」を導く表現に拠りつつ、「大伴の御津の浜松」が「待ち恋ふ」と浜や松を主体に詠むところにも祈りの要素は濃い。こうして本歌は、表現からみると、たとえば安倍仲磨がやはり唐土で詠んだと伝える、

あまの原ふりさけ見れば春日なる三笠の山にいでし月かも

（古今和歌集卷九）

などとはちがって、望郷歌というよりも旅の行程の無事を祈る歌としての実質をもっている。「歌の力」への信頼に

根ざした、出帆時の予祝の歌なのである。⁽⁵⁾そして、その旅の行程は、「好去好来の歌」の場合を参照すれば、大和や大伴の御津を終着点とするので、決して日本国へ帰りつきたいと表現するのではない。

五

憶良歌以外の遣唐使関係歌にも、祈りや行程の表現において同様のことがうかがわれる。

集中遣唐使関係歌は、憶良の歌のほかに二十首前後が数えられるが、多く渡唐の前の饞宴での歌とみられ、送られる側の歌はわずかに三首（第十次の大使藤原清河作が巻一九、四二四一、四二四四。阿倍老人作と伝誦する歌が同、四二四七）、それもいずれも短歌ばかりで、その他は送る側の人々の歌である。送る歌の詠み手には、官人のほか、天皇（孝謙、巻一九、四二六四、四二六五）・太后（光明、同、四二四〇）・宮廷歌人（笠金村、巻八、一四五三〜一四五五。柿本人麻呂歌集、巻十三、三二五三、三二五四もか）、親母（おや巻九、一七九〇）らがあり、歌の場にも公私の広がりはあるとみられるが、歌の内容はほぼ一致して相手の旅の無事への祈念である。神の加護をいうものが多いこと（巻一、六二。巻九、一七八四。巻一九、四二四〇、四二四三、四二四五、四二六四）、待つ側として自らの「いは齋ひ」をいうもののあること（巻八、一四五三。巻九、一七九〇。巻一九、四二六三、四二六五）、「言霊」をいうもののあること（巻二三、三二五三、三二五四）などからは、それら遣唐使を送る歌が言霊によって予祝しようとする呪歌的な性質を強くもっていることが知られよう。四二六二左注には、「右の一首は、多治比真人鷹主、副使大伴胡麻呂宿禰をは寿く」ともみえる。また別れの歌としての共通語句も多く、要するにこれらの歌は集中数多い旅立ちに際しての悲別歌の延長上にとらえられる。

さてこれらの歌の、行程の表現をみよう。

天平五年、入唐使に贈る歌一首并せて短歌 作り主未だ詳らかならず

そらみつ 山跡やまとの国 あをによし 平城ならの京師みやこゆ おしてる 難波なにわに下り 住吉すみのえの 三津に 舶乗ふなのり 直渡ただわたり
 日の入る国に 遣はさる 我が背の君を 懸けまくの ゆゆし 恐かしこき 墨吉すみよの 吾あが大御神 舶舩ふなのへに うしは
 きいまし 船舩ふなともに み立たしまして さし寄らむ 磯さきの埼埼 漕こぎ泊てむ 泊りとま泊りに 荒き風 波にあはせ
 ず 平たいらけく 率て帰りませ もとの国家みかどに

(卷十九、四二四五)

反歌一首

奥おくつ波 辺波へなみな越しそ 君が舶 漕こぎ帰り来て 津に泊とまつるまで

(四二四六)

傍線部によれば、この歌に観念されている遣唐使の旅の行程は、「山跡の国の平城の都→難波の住吉の三津→日の入る国(唐)→もとの国家みかど、津(住吉の三津)」である。行路の途中には「磯の埼埼」「泊り泊り」がある。「もとの国家」とは、原文「国家」に「対外的な意味が加わっている」(日本古典文学全集『萬葉集』)にしろ、長い航海の果てにたどりつく「朝廷みかど」であり、冒頭の「そらみつ山跡(大和の意)の国」との対応において「もとのこの大和の国に」(新潮日本古典集成『萬葉集』)とも意識できよう。旅の無事を祈る歌だから当然だともいえるが、こうして旅の行程としては「好去好来の歌」の場合と同様、「大和→唐→大和」が詠まれているので、日本国と唐国との往還といった表現はしていない。反歌で住吉の津が終着点として詠まれているのも、「好去好来の歌」にひとしい。

また、「山跡→難波の住吉の三津」と詠まれている点は、六三番歌の「日本」から「大伴の御津」へと続く氣息の理解を助ける。大和から難波(大伴の御津)へ、あるいは難波から大和へと詠むのは、実際の行路に沿った定型的な表現であった。遣唐使の場合とは限定できないが、筑紫以西へ旅して客死したらしいひとを傷む挽歌に、その

「君」の行程を、

あきづ島 倭を過ぎて 大伴の 御津の浜辺ゆ 大舟に ま梶しじぬ繁貫き

(巻一三、三三三三)

と、やはり「倭」→大伴の御津」と詠むし、逆に帰路では、遣新羅使人の場合だが播磨国家島で詠んだという歌のうちに、

ぬばたまの夜明かしも船は漕ぎ行かなみ津の浜松待ち恋ひぬらむ

(巻一五、三七二一)

大伴のみ津の泊りに船泊てて龍田の山をいつか越え行かむ

(同、三七二二)

と、やはり「大伴のみ津」から「龍田の山」を越えゆく先、つまり大和への行程が暗示されている。

ちなみに、六三番歌の「日本」を大和と解すると、続く「大伴の御津」が大和の国にはないゆえに二つの地名の関係が不可解となるという見方があるけれども、しかしこうして行程の表現の例をみると、大和と大伴の御津を合せ詠むことは必然的でさえあることが知られよう。かえて不可解さは、日本国へとまず大きくいって、続いて大伴の御津と小地名を詠んだと解する方にある。

遣唐使関係歌に戻ると、ほかに難波からの出港をいうものがある(巻八、一四五三。巻九、一七九〇題詞)。また、

住吉すみのえに齋いつく祝はふりが神言かむことと行くとも来くとも船ふねは早けむ

(巻一九、四二四三)

にも、住吉を旅の起点・終点とする観念がみえる。

こうして、憶良歌以外の遣唐使関係歌でも、その旅の行程は「大和」→大伴の御津(難波)→唐→大伴の御津→大和」と把握されている。なぜ大和や大伴の御津がしきりに詠まれるのかといえ、それが出発しまた帰着すべき土地であり、その名を挙げその間の行程を描くことによって旅の無事を祈念するためである。これらのことは、先の憶良の「好去好来の歌」の場合と変らない。そしてこうした彼らの観念においては、決して使人が「対馬の渡」(巻一、六二)や「値嘉の岫」(巻五、八九四)まで無事に帰ってくれば、つまり日本国の境まで達すればよいと

いうものではない。あくまで大伴の御津まで、大和までなのである。ふたたび遣新羅使人の場合だが、壹岐の島で客死した雪連宅満を傷む一人は、そうして壹岐の島にある状態を、「遠とほの国くにいまだも着やかず也麻等まとうをも遠く離さかりて」(巻一五、三六八八)と中途半端だとして詠む。思慕の対象は大和であり、やはり帰りつくべきは大和なのである。六三番歌は、旅の行程の観念や旅の無事への祈りという点で、以上の遣唐使関係歌と決して無縁ではない。それどころか、先にもみたように、その語句や表現は全くそれらの歌の範疇にあることがわかる。歌自身は、望郷歌というより旅立ちの歌、それも旅の無事を祈念する歌なのである。

こうしてみると、「早く日本へ」といわれるその「日本」は、大和を意味するというほかはない。これを日本国と解する通説は、状況の特殊性への先入見にもとづく誤解であるといわねばならない。

ただし、こうも付言しておく。「大和」は和歌の世界で日本国の中心としての大和という意味になっている。その「大和」が、帰り着くべき土地として「外つ国にあることの自覚の中に発せられ」た(中西進『山上憶良』。本稿第三節に引用)とき、「日本」は日本国をも含意したのであろう。言い直せば、本歌の「日本」は大和であるにちがいないのだが、「早く(日本国の中心たる)大和へ(帰ろう)」といわれたその言外に、日本国への帰還は意識されていたであろう。外国で詠まれた歌であるという特殊性が、ここにはたらく。

題詞との関係にふれておけば、題詞「山上臣憶良、大唐もろこしにありし時に、本郷くにを憶おもひて作れる歌」が、外側からの歌の説明として歌よりも後れて書かれたものであることは自明であらう。他国にあって「本郷を憶ふ」と望郷を強調するこの題詞は、大和におけるこの歌の一つの受容のあり方を示す。「本郷」は漢語として故郷の意、万葉歌にも、

燕来る時になりぬと鴈かりが鳴ねは本郷くに、しほ思おもひつつ雲隠り喧なく

と「本郷」をクニ(故郷)に宛てる。また遣新羅使人等の、

筑紫の館^{むらつみ}に至りて本郷^{くに}を遥かに望み、^{かなし}悽愴びて作る歌

(卷一五、三六五二題詞)

は、「本郷」がヤマトをさす点でも本歌の例にひとしい。ではこの故郷の意の「本郷」が本歌の場合具体的にはどこをさすか、とあえて問うなら、「大唐」との対比においては日本国をさすともみえるが、歌詞の中でも特に「日本」との対比を考えれば大和をさすというほかはない。ただ両者は排他的ではなく、「早く日本へ」が言外に日本国を含意したと同じ意味において、この本郷も日本国を含意する。日本国の中心たる大和をさす。

もう一点、弁正の詩との関係についてもふれておこう。懷風藻に、

五言。在唐憶「本郷」。一絶。

日辺瞻^ニ日本、雲裏望^ニ雲端。遠遊勞^ニ遠国、長恨苦^ニ長安。

と載る詩は、六三番歌と特にその初句及び題詞の類似が指摘され、作者弁正が憶良と同次の船で渡唐した人であることも手伝って、直接の影響関係が説かれることもある。そしてこの詩の「日本」は、たしかに日本国を意味するであろう。

しかし、両者の共通点はそれと認めておくとして、比較のためには両者の相違点もみておかねばならない。弁正の詩の「日本」がなぜ日本国を意味するかといえば、それが漢詩中のことばだからである。この「日本」は漢詩の有する世界観の中に位置づけられるところの日本国であるといってもよい。これは、正格漢文で書かれた日本書紀や統日本紀が、先述のように意識的に「日本」の文字を用いて外国に対する日本国を示したことと通ずる。一方、憶良の歌の「日本」は、和歌(倭歌)であるゆえに大和なのである。和歌の有する世界観(和歌的風土の構造)の中でこそ、この「日本」は読み解く必要がある。

先に、本歌の「日本」が平安中期頃からすでにヒノモトと訓まれて日本国と解され、それでの享受が長くかつ広がったことを述べた。近世以来、ヒノモトの訓は否定されヤマトと訓まれるようになったけれども、しかし訓みは

改められても「日本」は依然として日本国と解されてきた、ということになる。ヒノモトとしての長く広い享受史が、今日まで影響を与えているというべきか。だが、この歌を万葉歌の世界の中で読解するとき、以上三節にわたって検討してきたように、「日本」は大和を意味するというほかはない。

六

万葉集六三番歌のヤマトと同様の論議は、次の欽明紀（三年七月）の歌謡のヤマトにも及ぶべきだろう。

同じ時に慮にせられたる調吉士伊企雛、人と為り勇烈くして、終に降服はず。新羅の閼将、刀を抜きて斬らむとす。逼めて褌を脱かしめ、追ひて尻臀を以ちて日本に向かはしめて、大きに号叫なり叫びて曰はしむらく、「日本の将、我が臆胆を啗へ」といはしむ。即ち号叫びて曰はく、「新羅の王、我が臆胆を啗へ」といふ。苦め逼まると雖も、尚前の如く叫ぶ。是に由りて殺されぬ。其の子舅子、亦其の父を抱へて死ぬ。伊企雛、辞旨の奪ひ難きこと、皆此の如し。此に由りて、特り諸の将帥の為に痛み惜しまる。其の妻大葉子、亦並に禽にせらる。愴然みて歌ひて曰はく、

加羅国の城の上に立ちて大葉子は領巾振らすも耶魔等へ向きて

(100)

或有、和へて曰はく、

加羅国の城の上に立たし大葉子は領巾振らす見ゆ難波へ向きて

(101)

（土橋寛『古代歌謡全注釈 日本書紀編』による）

まず記紀歌謡中のヤマトの用例をながめておくと、紀歌謡にはヤマト・ヤマトノクニが合わせて九首に一一例、うちヤマト九例、これらは当面の一〇〇番歌以外はすべて大和を意味する。⁽⁶⁾ 記歌謡では計九首に十例、うちヤマト

八例でこれらもすべて大和を意味する。「枕詞十ヤマトノクニ」というかたちで日本国を表すものもあり（記七一・七二——紀六二・六三に重出、結局記紀歌謡のヤマトのあり方も基本的には万葉歌の場合と変わらない）。

ところが、この一〇〇番歌のヤマトのみは、従来日本国と解されてきた。それには、この歌が物語の中では新羅と日本との戦いの文脈のうちにあること、直接的には地の文に二カ所「日本」とあること（傍線部）からの類推が大きく作用していると思われる。特に「（尻髻を以ちて）日本に向かはしめて」と、歌謡の「ヤマトへ向きて」とはそのまま対応するかにみえる。

しかし一方、このヤマトを日本国と解すると、次の歌謡一〇一番歌の「難波へ向きて」との対応に問題が生ずる。大葉子の一〇〇番歌に或人が応じたというこの一〇一番歌は、一〇〇番歌と、

是れ一首の上に、たゞ七字換りたるのみにて心詞全同じことなり。

（稜威言別）

というさまであり、するとその相同性において「日本」と「難波」の対応では不自然にうつるのである。この問題を、稜威言別では、「難波」の方を疑問視することによって解こうとしている。すなわち、前文に続けて、

殊に難波は、此国の一郷の名なれば、異国より向^チ難波^{ナニハ}など云べきに非ず。

と。たしかに、「韓国の城の上に立たし」大葉子が領巾を振る方向が「難波」というのでは、地理の感覚において奇妙な感覚に陥る。たとえば、

難波ハ舟ヲ泊ル津ナレハ、故郷ヲ恋テ、帰ラム事ヲ願フ心ノ中ヲ弥アラハセリ。

（厚顔抄）

というごとき、諸注に多く説かれる理由を考慮してもなお、である。

だが、もしこの歌謡が、大和（やや広くとらえる）において伝承されたとすればどうか。これらの歌謡を含む物語は、任那滅亡にまつる数ある物語のうちの一つであり、調吉士伊企雛とその妻大葉子の忠国と望郷の悲劇として、百済系氏族調氏の述作の手が加わっている⁽⁷⁾にしても、大和の人々にこそ享受されたものであろう。大葉子の領

巾振りの方向を「難波」と歌う必然性がそこにある。大葉子は、帰り着くべき地、難波に向かって領巾を振り、望郷し、またその土地の呪力を招こうとした、というのである。その大葉子の像は、伊勢国の能煩野^{のぼの}で死の病を得てしきりに大和を慕い、その呪力を招き寄せようとした古事記の倭建命の像といくらかは重なる。

こうして、大和での伝承を考えると「難波」と歌われることが了解できるのだとすれば、同じ理由で一〇〇番歌の「ヤマト」も大和と解すべきである。そうみることによって、一〇一番歌の「難波」との対応の不自然さも解消されよう。大葉子が望郷の土地を「大和」と歌ったところを航路の終着点「難波」と歌いかえることが「和^{にた}」えることであった。ここでも、万葉歌の場合と同様、行程の観念に沿って大和と難波が合せ歌われているのである。念のためにいえば、「大和」と歌われたことが地の文の「日本」と齟齬^{そご}するとは、一概にいいないであろう。繰返すように、大和は日本国の中心としての大和である。あるいはまた、地の文では「日本」と書かれているけれども、資料となった伝承においては、その部分が大和であった可能性もある。日本国を強調する日本書紀の思想の方にこそ、この物語におけるヤマトの語をわかりにくくしている原因があるのかもしれない。

結局、外国で歌ったとされるこの両首において、「ヤマト」と歌いそこから「難波」と分出してくるあり方は、万葉六三番歌の「日本」から「大伴の御津」へと続くあり方と同一であるということになろう。

注

- (1) 集中、「日本^{ひのものと}之山跡の国の鎮めとも座す祇^{かみ}かも宝とも成れる山かも」(巻三、三一九)と、一例のみヒノモトと訓む例がある。また続日本後紀に、「日本^{ひのものと}乃野馬臺乃国遠」また「日本^{ひのものと}乃倭之国波」(巻一九、興福寺僧長歌)とみえる。「たゞしこれらも国の名にいへるにはあらず。下のやまとが即ち物名のやまとなれば、わづらはしく国名を重ねていふべきにあらず。これは只やまとといはむとの枕詞也」(石上私淑言、巻二)。
- (2) 拙稿『舒明天皇と大和——和歌的風土の創造——』(犬養孝編『万葉の風土と歌人』所収、一九九一年)。

- (3) 川口常孝『いざ子ども早く日本へ』歌の背景（「帝京大学文学部紀要」一三、一九八一年一〇月）は、憶良の「日本」の用字を国家意識にもとづくもので「倭」の用字に対すると説くが、叙上の検討により従えない。
- (4) 参考、嘉手苅千鶴子「おもろと万葉歌——航海に関わる表現よりみた——」（「沖縄国際大学文学部紀要」一五——、一九八六年一〇月）。
- (5) 益田勝実「遣唐少録山上憶良外伝」（「日本文学誌要」三五、一九八六年二月）。
- (6) 中で、崇神紀の「この御酒は わが御酒ならず 椰磨等なす 大物主の 釀みし御酒 幾久 幾久」のヤマトを日本全体を意味するという見解もあるが、大物主神の名乗りに「我は是倭国の域の内に所居る神、名を大物主神と為ふ」（崇神紀七年二月）とあることからすると、なお大和を意味しよう。
- (7) 土橋寛『古代歌謡 日本書紀編』（一九七六年）。